

五尺七寸の光

信州上田。江戸時代、北国街道ほつこくかいどうの宿場町としてにぎわった紺屋町の呉服商「丸屋」の娘、おさんが自分の背丈を気にし始めたのは、いつのことだったか。七つになるころには、同じ年ごろの女の子よりも頭ひとつ高くなっていたし、十一のころには、三つ年上の兄の太一の背を抜いた。兄の友だち連中が、自分のことを「大女」と陰で言っていることを知って、ひどく傷ついたのもこのころだ。どちらかというと言えぬ前に出るのが苦手なおさんは、その傷を胸にしまい込んだ。

十二のとき、大好きな祖母はな女めが、「岳たけのぼりの幟」に連れて行ってくれることになった。「岳の幟」は、雨が少ないこの地で三百年以上続く雨乞いのまつりだ。

「ばば様、おときちゃんとお絹ちゃんも誘ってもいい」

「おうおう、よいとも。みなで食べられるようになるみおはぎをたんと作っていいこうかね」  
暖かな縁側で子猫をなでながら、祖母はにこにこ応えた。

もともと丸屋は、亡くなった祖父が始めた店だ。農家の三男だった祖父は、農作業の手伝いや溜池工事の手間賃をこつこつと貯めて、北国街道から江戸へ出て、商売を学んだ。本当は絵師になりたかったのだという。はな女と知り合ったのも絵草子屋だった。丸屋の呉服がどこか垢ぬけていると評判になったのも、祖父と神田の町医者まちいしやの娘だったはな女の趣味のよさが現れているのである。今は奉公人も増え、祖母が店に出ることはめつたにないが、古い顧客は、はな女と話をしたくて来店することも多い。

祭りの日。太鼓の音が響く中、家の屋根より高い幟ぼりが何十も練り歩く。青い空を背景に赤、青、黄、色鮮やかな色柄の布地の龍が風をはらんで飛ぶ。歌声の方を見ると、大勢の見物人が、獅子舞に歓声を上げていた。

「おさんちゃん、あれ見て、お獅子よ」

「あの幟の花柄、私、欲しい」

おときやお絹ははしゃいでいたが、おさんは笑顔を浮かべはするが、はな女の後ろでうつむきがちだった。見物人の中に自分の悪口を言った少年たちの姿を見つけたからだ。もちろん、おときもお絹も少年たちに気づいている。チラチラ見ながら、突っつきあっているところを見ると、二人のうちのどちらかが、少年たちの中の誰かに気があるらしい。おさんは少

し寂しくなった。

十五になると、おさんの背丈は五尺七寸になった。このころの男でもめつたにいない長身である。家が呉服屋だから、着るものには不自由しないが、色柄は、年ごろとは思えない地味なものばかりになった。

「おさんは、色白で可愛い眉毛をしている。もっと明るい色を着たらいいと思うよ」  
はな女は言ってくれたが、おさん自身はなかなか勇気がでなかった。

ほどなく、おときは柳町の造り酒屋に、お絹は鍛冶町の穀物問屋に嫁いでいった。十八を過ぎるころには、未婚なのはおさんと婿取りの予定がのびのびになって旅籠屋の娘だけになった。心配した両親は、生島足島神社や長楽寺・常楽寺・安楽寺の三楽寺参りを続けたが、縁談はこないままだ。

「そりゃあ、私もいろいろと当たっては見たんですよ。でも、なかなかねえ…」

庭で仏間に供える菊を切っていたおさんの耳に、叔母の声が聞こえてきた。おさんはこの叔母が苦手だ。思ったことを口に出さずにはられない性格の叔母は、「本当に何を食べたらこんなに大きくなれるのかしらねえ」などと、おさんの心にチクチクとトゲを刺していく。こんなとき、「こどものころ大きくなれと用意してもらった力餅を食べ過ぎたんですよ」と笑い話にでもできる器量が自分にあればとも思うが、それはない。できれば会いたくないと庭からお勝手に回ったが、叔母はわざわざ勝手口にやってきた。

「おさんちゃん、気にすることないよ。世の中には、後添いで幸せになった人だってたくさんいるんだから。太一っちゃんの嫁取りまでには、きつといい話があるからね」

また、トゲを刺していった。

仏間にははな女がいて、白と黄色の菊を渡すといつもの笑顔を向けてくれた。

「いい具合に咲いたねえ」

菊と線香の香りが漂う。おさんは、この香りが好きで、うつとり目を閉じた。

「お前は、小さい時から菊の香りが好きなんだね…。実はね、おさん、私の古い知り合いで信濃国分寺の近くで庵を結んでいる庵主様が、お年を召して身の回りの世話をしてくれる人を探しているんだよ。よかったら、お前、しばらくそこでお手伝いをしてくれないかえ」  
突然の話で、おさんは目を丸くしたが、なぜか、その瞬間、これはとてもいい話ではないかと感じた。菊の香りのせいかもしれない。

「ばば様、私、行きたいです」

両親も賛成してくれ、三日後には出立した。信濃国分寺には、古来、尼寺もあり、多くの

尼僧がいたという。おさんが訪ねた庵は、思った以上に立派な建物だった。黒いお仕着せの中年女性に案内されて、奥の間に行くと庵主が待っていた。そこは書庫らしく、壁一面の棚に書物が並んでいた。

「よう、いらっしやいました。まあまあ、はな女様によく似て、お可愛らしいこと。これからよろしゅう頼みます」

なんと品の良い声だろう。それに八十歳近いと聞いていたが、足腰はしっかりしていて、お弟子さんもいる。自分をここへ寄こしたのは、祖母の思いやりだったのだなとわかった。

それからの日々は、おさんにとって素晴らしい経験になった。おさんは炊事、洗濯、庭の手入れなどもするが、余った時間は本を読めた。ここには精進料理本から植物や動物の各種図録、医学、本草学や天文学もある。すべてが理解できたわけではないが、目の前に新しい世界が開けた気がした。中でも算術の本が面白い。「五明算法」という本には、扇の中に描かれたいくつつかの円についての問題が出題されていたりしていて、おさんは夢中になった。

いつもより穏やかな冬が過ぎて、あつという間に半年がたったある日、はな女が足を傷めたと知らせが来た。急いで丸屋に戻ると、はな女が足首に湿布を巻いて縁側にいた。

「おば様、大丈夫ですか」

「心配かけてすまないね。庭でちよいと足をひねって転んでしまって…。もう大丈夫だよ。それよりも俺は楽しいかい」

「それはもう、よくしていただいています。本もたくさんあって」

「そうかい。それはよかった。お前は子供の時分から本が好きだったからね」

「特に算術が面白くて…そうだ、うちの古い算盤そろばんをいただけませんか」

「おじ様が使っていたのがあるよ」

「そんな大事なものは…」

「道具は使われるから命があるんだよ。おじ様も喜んでくれるはずだよ。そうそう、番頭の幸兵衛が、別所温泉の湯につかれれば早く治るだろうというので、明日にもでかけようと思うんだよ。お前も来てくれるかえ」

「すぐに行きます」

問屋場にはな女が乗る駕籠かごを用意してもらい、おさんと手代、女中一人が付き添って別所温泉に向かった。春の日差しが暖かく、途中で弁当をつかいながらのんびりした道中だった。

一行が常楽寺参道の入り口にある將軍塚辺りに着いたのは、昼を大分過ぎた頃だ。將軍塚は昔、人々を苦しめた戸隠山の鬼女きじよ・紅葉もみじを、北向観音の宝剣で退治した平維茂たいのこれもちの塚ともいわれ、供養塔が建てられている。そこには厄災時に人々を救うための黄金が埋められているという伝説があった。ただし、心が正しくない者がその金を掘りだせば、町は滅ぶともいわれる。

ひとりの男がふらふらと塚の前に来たかと思うと、手にした太い枝のようなもので突然、土を掘りだした。うしろにも二人いて、三人とも中年の商人風だが、昼間からかなり酒を飲んでいられるらしい。

「一攫千金、して見しようぞ」

「おお、やってみせろ」

湯宿の番頭らしいのが走ってきて枝を持つ男の手を止めようとしたが振り払われ、塚から転げ落ちてしまった。その姿を見て笑う三人を見たおさんは思わず駕籠屋が手にしていた竹の棒を手にして塚を登っていた。そして、なおも掘り続けようとする男が、自分を見上げた瞬間、棒を相手のみぞおちめがけて突き出した。ここを狙ったのは、子供の忍者が大きな敵を棒で撃退する絵草子の場面を思い出したからだ。

「うううっ」

男はしゃがみ込んで動かない。連れの二人が何か言おうとしたが、塚の上で棒を手に仁王立ちになったおさんを見て、

「ひっ、鬼女」

と叫び、しゃがんだ男を置き去りに逃げ出していった。参道にはその様子を見ていた湯治客もいた。大女の次は鬼女：おさんは唇をかみ、ぎゅっと目を閉じたが、涙があふれた。

半月ほど別所温泉に滞在し、はな女とおさんは丸屋に戻った。足が癒えた祖母はしょんぼりするおさんを何かと励ましたが、あまり効果はなかったようだ。

そこに思わぬ話が舞い込んできた。

「縁談：私にですか」

「そうなんだよ。海野町<sup>うんのまち</sup>本陣の柳澤家から、跡取りの太郎兵衛さまの嫁にお前をぜひにと」

「ご本陣の跡取りといえ、大変なお役目です。何かの間違いじゃないですか」

「それが、お前を見染めたと太郎兵衛さん本人が仰っているそうなのだ」

父も母も困惑気味だったが、三日後には正式に仲人が挨拶にやってきた。聞けば、太郎兵衛は二十二歳で初婚。あとき別所温泉にいたのだという。あの大立ち回りのことは、忘れたいおさんだったが、一応、話だけは聞いて、考えさせてもらうことにした。

「聞いたよ、あんたの縁談のこと」

耳ざとい叔母がすぐさま押しかけてきた。

「でもねえ、気をつけた方がいいよ。海野の柳澤さんといえ、名字帯刀を許された名家だけど代々変わり者の当主が多くて、寄り合いに一切出ないどころか、ご本陣にご滞在の殿様にも挨拶にも出てこないというんだからねえ。財はすごいけど、なんだか薄気味悪いじゃないか」

どうしてこういうことを言いに来るのかと思ったが、おさんはかえって太郎兵衛に興味を持った。

「叔母さん、相手は鬼男とか龍の化身かもしれませんね」

「バカ言うんじゃないよ。おお、怖っ。あたしはもう帰るよ」

鬼男だったら、私にお似合いかもしれない。おさんにしては、珍しくちょっと拗ねた感情だった。

そのさらに三日後、わざわざ母親のつねとともに丸屋を訪ねてきた太郎兵衛を見て、おさんは少し驚いた。背丈はおさんより低いものの、鬼どころか、優しいまなざしを持つしっかりした若者だったのだ。

「このご縁はぜひにと思っております。どうぞ、よろしく願います」

手をついたおつねも福々しい笑顔の持ち主で、母やはな女とも茶菓をはさんでにこやかに話をしている。太郎兵衛は太一に誘われて縁側に腰かけた。

「別所温泉で妹を見染めたというのは、本当ですか」

二人の後ろにいるおさんは、顔から火が出そうだった。

「はい。実に勇ましく、私の探していたのは、この人だと直感いたしました」

「兄として言いますが、妹はふだんは気が優しくおとなしい性格です。じゃじゃ馬だと思っ

てもらっては困ります」

「それはもう、宿でおぼ様を労わるお姿を見てわかりました。私どもは本陣でお武家様をお泊めしますので、ああした心配りと、いざとなったときの強い心がある方でない困るのです」

「それはご当主の仕事では」

「私は当主も妻も、広く時世を知り、学び、働くべきと存じます」  
思わず、おさんが口を出した。

「太郎兵衛さんは、本をお読みになりますか」

「はい。江戸の本屋からいろいろと取り寄せております」

「算術は」

「商売にも欠かせませんし、難しい問題を考えるのも楽しいものです」

「もしや、『五明算法』をお持ちでは」

「今、一等好きな本です」

縁談はとんとん拍子に進んだ。祝言の日、綿帽子を被ったおさんの姿を見て、両親は盛大に泣いたが、「何か言うやつがいたら、棒で突いてやれ」と言った兄まで目を赤くしているのを見て、おさんは胸が熱くなった。

柳澤家の披露宴はごく内輪で行われた。当主は代々太郎兵衛を名乗るが、おさんはそこで初めて、夫の父である先代の太郎兵衛に会った。りっぱな紋付き袴の先代は、おつねに手引かれ、ゆっくりと着座した。おさんは手をつき、「おさんでございます。どうぞ、末永くよろしくお願いいたします」と挨拶をした。目を閉じ、少し顔を傾けながら聞いた先代は、「よいお声じゃ。こちらこそ、よろしく頼む」

冬至の日。太郎兵衛とおさんは、「生島足島神社」に結婚の報告をしに行くことにしていた。供も連れず、二人で参拝をすませると、その肩に赤い花びらがひらひらと落ちてきた。「お前様、どこから飛んできたのでしょうか。赤い花びらが」

「この地には、日の光と大地を示す陽ノ宮碧という精霊がおるといふ。我らを祝ってくれておるのかもしれない」

まもなく太郎兵衛が待っていた時刻になった。少しずつ沈み始めた夕陽が西の鳥居にすっぽりとおさまり、黄金色の光が二人を照らしながら、一気に塩田平を走り、信濃国分寺まで一本の道になる。それは若い夫婦が歩む道そのものに見えた。

「私の祖父も父も早くに視力を失くし、侮られぬよう人前に出ないようになつた。私もいずれはそうなるかもしれん。それでも私はおさんと力を合わせて家を守り、外に出る。ここにもまた来たいと思う。：助けてくれますか」

「喜んで、お供いたします」

月日は流れた。

あの祝言から、三十年余りたつて、ご維新の世となつた。本陣の御用はなくなつたが、宿場の顔として、太郎兵衛、おさん夫婦は新政府とも渡り合ひ、慕われている。子ができなかつたのは残念だったが、太一の三男を養子に迎え、今や孫が三人。みな長身の娘たちだ。

ある夏至の日。太郎兵衛とおさんは、再び生島足島神社にいた。

太郎兵衛の目は、もう何年も前に見えなくなつていた。

やがて夜明け。太陽は東の鳥居の真ん中から昇り始めた。

「輝くおてんとうさまがこの身を包んでくれる。この目にもよく見える。」

うれし気な夫の顔は、冬至の日と変わらない。

この人と歩いてきてよかつた。そして、まだまだ進むべき光の道がある。

五尺七寸の高さから、おさんは、その道をしっかり見つめていた。